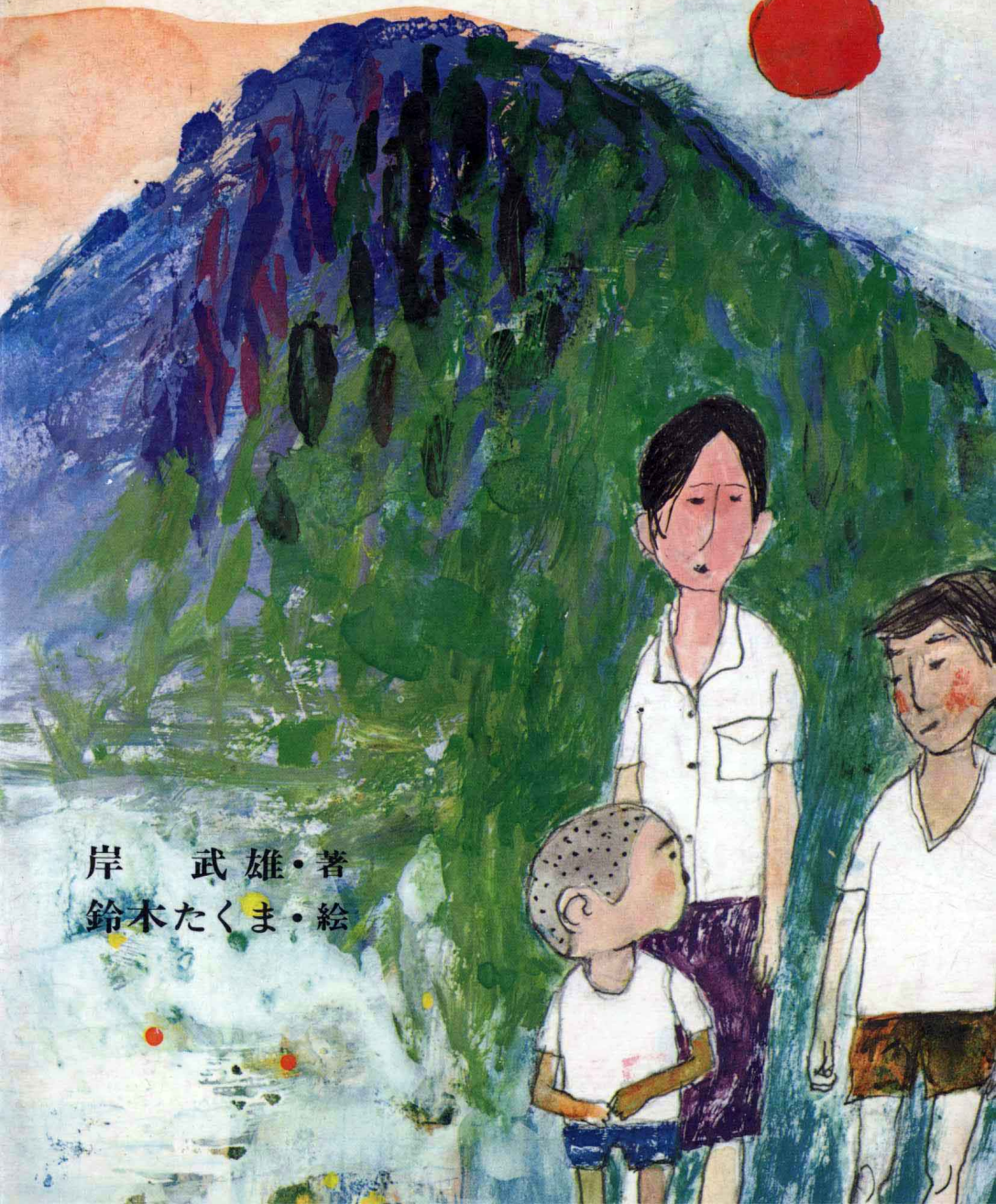
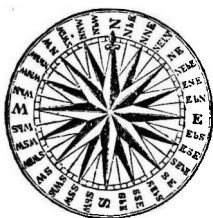


風の鳴る家



岸 武雄・著
鈴木たくま・絵





偕成社の創作文学

風 の 鳴 る 家

NDC 913 偕成社 246p 21cm 1978年

1978年 3 月 初版第 1 刷

著 者	きし 岸	たけ 武	お 雄
発行者	今	村	廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

T E L (03) 260—3221 (代) 〒162

振 替 東京5-1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

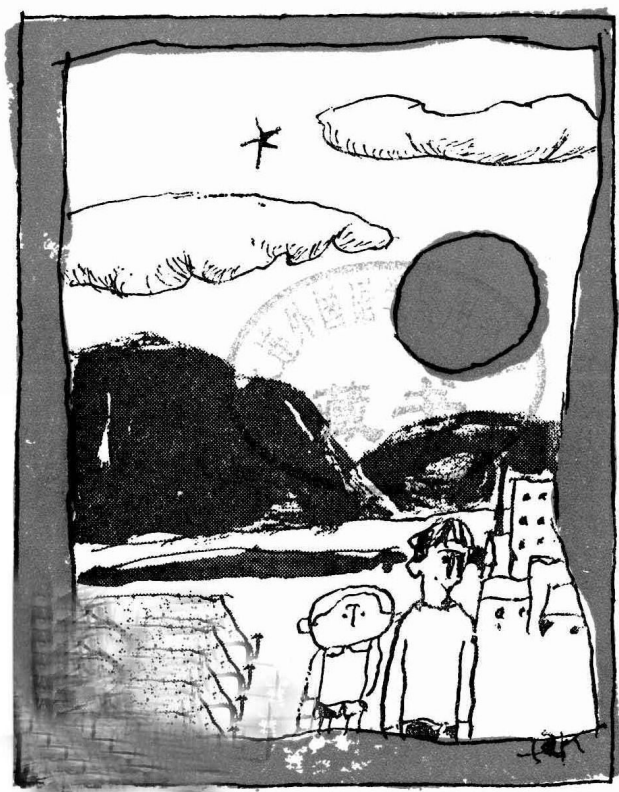
8393-720120-0904

©岸 武雄 鈴木たくま 1978

Printed in Japan

風の鳴る家

岸 武 雄



偕 成 社

日本財団支援

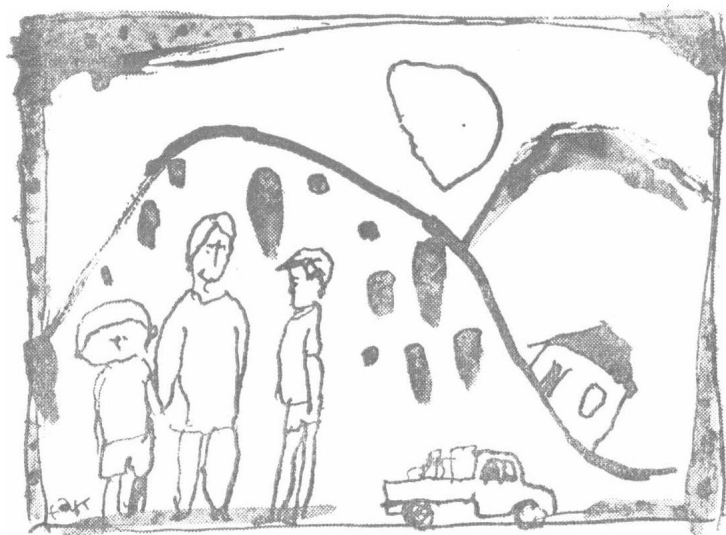
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

●まえがきにかえて

ある人に百ひきのヒツジがあり、その
中の一ひきがまよい出たとすれば、九十
九ひきを山に残^{のこ}しておいて、そのまよい
出ているヒツジをさがしに出かけないで
あるうか。もしそれを見つけたなら、よ
く聞きなさい。まよわないでいる九十九
ひきよりも、むしろその一ひきのため
によろこぶであろう。そのように、これら
の小さい者のひとりがほろびることは、
天にいますあなたがたの父のみこころで
はない。

——マタイによる福音書十八章より



風の鳴る家／もくじ

一章 兄と弟

1 小さなお客さま 8

2 三吉さんきちの生おいたち 19

3 ねごとのけいこ 31

4 もえる手のひら 42

5 ひろった子犬 52

二章 あらし

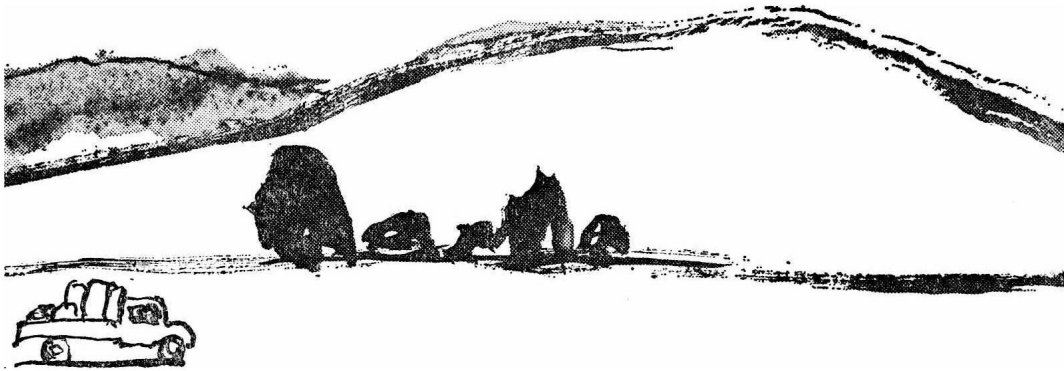
6 思い出の炭山すすやま 64

7 うちがうちでなくなった 74

8 かなしい芝居しばい 84

9 吹きあれる心 93

10 村を出る朝 106



三章 新しい学校

11 小さな家 118

12 おじいちゃん先生 130

13 石焼きいも 141

14 ひとくしのだんご 153

15 照る日くもる日 165

16 足がら山の金太郎 174

四章 サブとサンチ

17 ブタのいるうち 184

18 長良の川原ながらかわら 195

19 一台のバトカー 208

20 どしや降りふりの道 219

21 星の降る夜 231

作者と作品について 赤座憲久あかざのりひさ





著者・岸 武雄

1912年岐阜県に生まれる。岐阜師範卒業後教職に従事し、長く県教育界の指導的地位にあった。著書は『風船学校』『もぐりの公紋さ』『千本松原』『炭焼きの辰』『プータス大王のいたずら』『どろんこの餅』『飛驒の馬小作』など多数ある。住所／岐阜市長良光栄町2-6

画家・鈴木たくま

1918年、横浜に生まれ、東京で育つ。児童出版美術家連盟会員。主な作品に『ふとったきみとやせたぼく』『竜宮へいったトミばあやん』『お日さまのむすめ』『あんまりだ！ ジェミー』『坂道のある学校』『踊り子マス』等多数ある。住所／埼玉県所沢市西新井町5-13

一章 兄と弟

このお話は戦争がおわって十年
ほどたった一九五六年（昭和三十
一年）の春からはじまる。



1 小さなお客さま

まどから吹いてくる風が、つくえの上にひろげた教科書のページをめくる。

和市が外へ目をやると、向かいの日坂とうげが、いつもよりはっきり見える。ふもとの林がみどりがかっているのは、いっせいに芽ぶきはじめたからだろう。

——気もちええ日やなあ。とうちゃんもいまごろ山で木を切りながら、でっかい声で歌をうたっておるやろ。

和市は、うつとりとした気分^{きぶん}で、いつまでもまどの外をながめていた。

森山^{もりやま}先生の読み声は、まだつづいている。そのうちに、だんだんとおこ小さくなってきた。

——眠^{ねむ}っちゃあかんぞ。

あわてて頭をふったとき、教室のあちこちから、おしころしたわらい声がきこえた。びっくりして顔をあげると、廊下^{ろうか}側のまどからにぎりめしのような頭^{がわ}がのぞいていた。

——あ、三吉^{さんきち}や！

和市のむねは、ドキンと音をたてた。顔に血がのぼるのが自分でもわかる。

「にいちちゃん！」

兄を見つけた三吉は、かん高い声でさげんだ。

どっとわらいがおこり、ふりむいたおおくの目が和市の顔にそそがれた。

——三吉のあほうめ、授業中によぶやつがあるものか、くそつ。

力をこめてにらみつけてやったが、いっこうききめがない。

「ほほう、小さなお客さまがまたきたな。」

森山先生は読みかけの本をつくえの上におくと、ゆっくりまどのほうへ歩いていった。

「にいちちゃんはな、いま勉強中だ。さ、自分の教室へおかえり！」

先生がガラス戸をしめようとすると、三吉はとつぜん、うしろにかくしていた画用紙をまえにさしだして見せた。

「ほほう、これ、ボクがかいたのか。」

三吉はにやつと顔をくずし、鼻じるをすすりあげた。

画用紙を手にした先生は、ちよつと首をか上げた。クレヨンでまるが大きくかいてあり、その右と左から一本ずつと、下から二本の線が突き出ている。

「ボク、これ、なにをかいたの？」

「にいちちゃんや。」

三吉は、とくいそうに口をとがらせた。

「ははあ、なるほど……このまるいのは顔で、これとこれが手と足か……ボクは、にいちちゃんがだいすきとみえるなあ。」

先生は絵をかえすと、三吉の大きな頭に手をおいた。

「にいちやんはいま勉強中だ。今夜、きつと見てくれるからな。さ、おりこうだから、ボクは一年生の教室へおかえり！」

三吉は満足そうにこっくりすると、すべりおちそうなズボンを片手でにぎり、のっそりかえっていった。和市は、顔をあげられなかった。目は先生の声について字を追っていたが、意味はさっぱりわからなかった。頭の中は、さっきの弟のことではいっばいだった。

——にいちやんの教室へ遊びにきてはあかんと、あれほどいっておいだのに……。

と、はらをたてたり、「あの子は、みんなについていけるやろか」というかあちゃんの口ぐせを思いだして、ものがなくなったりした。

おわりのチャイムが鳴ると、和市はほっとした。しかし、もう運動場へ出て遊ぶ元気はなく、まどにもたれてぼんやり外をながめていると、ふいにうしろから声をかけられた。

「和市くん、ちょっと……」

ふりむくと、三吉の受けもちの朝原先生だった。たったいま階段をかけのぼってきたとみえ、ハンカチでひたいの汗をぬぐいながら、小馬のしっぽのようなかみの毛をぶるんとふった。

和市は、むねがさわいだ。

「あんた、三ちゃんを知らない？」

「えっ、三吉のやつ……どうしましたか。」

「いえ、ちょっと……。二時間めのとちゅうからすがたが見えないの。」



「……あのう、さっき、ぼくらの教室へちょっときたけど……」

顔を赤らめて和市は答えた。

「やっぱり、そうだったの。」

朝原先生ははじめて白い歯を見せ、にっとした。

「先生、三吉はあれから、一年生の教室へかえらなかつたんですか。」

「そうなの、二時間めの図工の時間中、ぶいっと出ていったきり……どこをふらついているのかしら……」

先生は、まどからのりだすように運動場をながめた。二階から見おろす深山みやま小学校の運動場は、こじんまりした池のようだ。ふりそそぐ光の中を、子どもたちが魚のようにとびはねていた。流れをさけ、メダカのようにかたすみに集まっているのが、一年生だ。

「いないようねえ……。うらのウサギ小屋こやのあたりに、ひょっとして……」

朝原先生はみだれたかみの毛をちょっと手でなおすと、すぐ教室を出た。和市も、うしろからついて歩いた。

「先生、ほんとに、すみません。」

「なにいつてるの。三ちゃんのいつもの、ちょっとしたおさんぽよ。」

先生はふりむくと、目をくるくるっとしておどけた顔をした。クリームのにおいがした。

うら庭はひっそりと日がたまって、当番の男の子がふたり、ウサギに草を食べさせていた。

「あんたたち、一年生の三吉くんをしらない？」

ふたりは、はじめ顔を見あわせていたが、すぐ大きな声で話した。

「そういえば、二時間めのおわりころ、ちっちゃい男の子が、門を出ていったなあ。」

「……………」

「ほら、おれんたあが算数の計算をやっておるころに、な。」

「しらん。おら、おんしのようによそ見なんかせんでああ。」

ふたりがこれだけ話すのをきくと、和市はつよい声でいった。

「先生、ぼく、さがしてきます！」

「そお、じゃ、おにいさんにおねがいしましょうか。」

朝原先生も、さすがにじいっとおくをながめる目つきをした。

和市はとぶように門を出たが、しばらく走ると、足がしぜんにおもくなった。

——三吉のやつ、どこへいったんやろ。

和市はとほうにくれて、なんということなくあたりを見まわした。昼ちかい村の中は、ほとんどの家が戸をしめ、ひっそりしている。おとなたちは、みな山か畑へ出かけているのだ。明るい日ざしが、かえって人氣のないことをしめしているようで、和市の心を不安にした。

道ばたの茂吉おじの家へ立ちよってみたが、ここも表戸はしまつてかど口ちかくの鳥小屋に、目をとじたチャボが二、三羽うずくまっていた。人かげがしたのでふりむくと、で、を背おった

村人^{むらひと}が、ふしぎそうにこちらを見ている。和市^{わいち}は、わるいところを見つけられたような気がして、下をむいて走った。鼻がつんとし、なみだが出た。

気がつくのと、うちのまえへきていた。

とうちゃんもかあちゃんも、炭山^{すみやま}へいつてるすのはずだ。それなのに、表の戸がわずかにあいていた。

「さては、三吉^{さんきち}のやつ！」

元気づいた和市は、ガラッと板戸をあけ、うちの中へとびこんだ。案^{あん}のじょう、うすぐらい土間に、見おぼえのある小さなズックぐつがころがっていた。ほっとするとともに、いままでこらえていたいかりが、むらむらもえあがった。

「三吉っ！」

さけぶといっしょに、しょうじをあけた。

やっぱり、三吉だった。火の氣のないいりりばたにあぐらをかいて、もぐもぐ口をうごかしていた。びっくりしたように和市の顔を見たが、さすがにおこっていることに気づいたとみえ、

「にいちちゃん、まんじゅう、うまいぞ。」

と、鼻の上にしわをよせおせじわらいをした。

「ばっかっ！」

和市はとびかかって、思いきりほつべたをたたいた。

「わあ、いたい、わあ……おら、にいのぶんは食わせんもん。わあ……おら、おらのぶんだけ食ったんや。わあ……」

泣きじゃくりながら、ひっしになっていいわけをした。

「ばっかっ！ にいはな、にいはな、そんなことでおこっておるんやないぞ。」

なさけなくて、和市は自分もいっしょに泣きたくなった。しかし、なぜ三吉がまんじゅうを食べにかえたか、わからないでもなかった。

それは、ゆうべのできごとだ。茂吉おじのうちの法事にいったとうちゃんが、箱にはいった大きなまんじゅうをもらってきた。ずっしりおもいまんじゅうだった。かあちゃんは、電燈の下へもっていき、首をかしげてはめた。

「こんなりっぱなまんじゅうが村で食べれるなんて、ゆめのような気がするわな。つい五、六年まえまで、さとうなんてものは、貴重品やったなあ。わざわざ揖斐の町からとりよせただけあって、こりや、たいしたもんじや。」

三吉はむろんおおよろこびで、まんじゅうを台所じゅうかついでまわった。

「三吉や、今夜はもうおそいし、いま食べてはからだにどくや。あす学校がひけるまで、しまっておくよ。」

かあちゃんは、三吉からまんじゅうをとりあげ、おあずけにした。戸だなへしまおうとしたが、ふとふりかえって、